

大分大ゼミに高校生参加

共同研究で相乗効果

大分大学経済学部（大分市）の「学問探検ゼミ」が受講者に好評だ。高校教育と大学教育をつなぐ高大接続教育「**ゼミ**」の中心で、高校生や大学生の学ぶ力、教える力を育てるのが狙い。大学側によると、全国でも先進的な取り組みだという。



研究成果を発表する大学生と高校生＝大分市

学ぶ力・教える力をつける

別府冷麺や日田やきそばなどのB級グルメが県内経済に与える影響は……。大分南高2年の栗林ひかりさん(17)が、大分大経済学部生の支援を受けて昨年10月から取り組んだ研究課題だ。先月、成果を発表した。

栗林さんは、B級グルメのコンテスト「B-1グランプリ」で2010年に優勝した「甲府烏もつ煮」（山梨県）が、年間約28億円もの経済効果を地元にもたらした実例を提示。大学図書館やインターネットで調べた売り上げや全国展開に関するデータに加え、コンテストやメディアで注目された直後、県内外からの

レポート
おおいだ

高大接続教育

入学試験だけだった高校と大学の接点を広げ、より緻密(ちみづ)に連携することで互いの学生の学習意欲向上を図る取り組み。双方の学生や教員が相互に向かい、共に研究したりする。大分大では、大学生を母校の高校に派遣して学生生活を紹介する「キャンパス大

注文が数倍に増えたという販売店や製造業者の証言も紹介し「B級グルメは、低迷する大分経済の活性化につながる」と結論付けた。栗林さんは「興味を持ってたことを掘り下げて学ぶ楽

「全入」…目的意識持たせる

使「、大学入学前に施す高校課程の復習授業、大学と高校の学生と教員が共同で研究する「学問探検ゼミ」(経済学部)を中心に取り組んでいる。こうした「高大接続教育の実践的プロジェクト」は2008年、大学のレベルを保つ方法として評価され、文部科学省の教育GP(大学教育・学生支援推進事業)に採択された。

側の募集に応じた大分南、大分雄城台、大分鶴崎の3高校の2年生計7人が3班に分かれて受講した。栗林さんの班(大学生2人と高校生3人)の研究テーマは「大分の経済を元気にする大分の現状と問題を地域学から研究する」。支援した大学生の江戸祐貴さん(20)は高校2年生時

大分大で県内の高校との連携が始まったのは00年ごろ。経済学部・高大接続教育室の佐藤裕哲・特任教授によると、一般入試後期日程で大分大経済学部の受験倍率は、1990年ごろまで常に2倍以上だった。それが年々下がり、98年には1・2倍まで落ちて全入時代を予感させたという。

全国の大学進学率も、90年に25%程度だったのが00年に4割を超え、09年には5割を超えた。大学が身近になった反面、「特に目的はないが、皆が進学するか自分も」という「高校4、5年生」のような学生が増えていったという。

佐藤・特任教授は「大学で目的を持ってない学生は、職を選ぶ時も『家から近い』『親元から通える』と言って、自分が本当にやりたい職に就かない。それが若者の早期離職にもつながっているのではないかと指摘。『大学全入時代を迎え、高校生は『なぜ大学へ行くのか』、大学生は『大学で何を学びたいのか』といった理由が見いださにくいう状況にある。学問探検ゼミで高校生と大学生が互いに刺激し合うことで学習意欲を高めた』と話している。(杉浦達朗)